

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 門脇陽子長老

開 会 招 詞 歴代誌上16章34-36節

* 賛 美 歌 6:1 (ソングシート)

1. 我らのみ神は ^{あめつち} 天地すべます、国々しまじま 喜びたえよ。アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 91:1

1. 主をほめうたえ、その聖所にて、主を賛美せよ。主の砦なる大空でほめよ。強き力の御業のゆえに主の御名をほめよ。

共同の祈禱 4 救済史祈禱 ⑤ ダビデ契約

あわ ぶか しゆ かみ すく やくそく く かえ やくそく たみ ち みちび
憐れみ深い主なる神さま、あなたの救いの約束は、たびたび繰り返され、約束の民がカナンち みちびの地に導かれてから、ダビデおう たを王として立て、彼と契約かれ けいやく むすを結び、その子孫しそんから永遠えいえんの王座おうざに着く者つ ものが出来ることを約束やくそくされました。

あわ と かみ やくそく たみ ぐうぞうれいはい かたむ とき つぎつぎ よげんしゃ おく
憐れみに富んでおられる神さま、あなたは、約束の民が偶像礼拝くわうらいはいに傾いた時、次々と預言者よげんしゃを送られました。かたくなな民たみはついにバビロンの手てに委ねられました。しかし、あなたは、恵みめぐによって、残れる者のこ ものを世界史せかいしの激動げきどうの中で支え、彼らの受難じゆなんの体験たいけんを用い、預言よげんと知恵ちえと黙示もくしとによって、約束やくそくの救い主すく ぬしを、受難じゆなんのしもべ・神かみの知恵ちえ・栄光えいこうの人の子ひと こ・契約けいやくの使者ししやとして待望たいぼうさせられました。

これら全てすべが、わたしたちの主しゆであり王おうであるイエス・キリストじつげんにおいて実現じつげんしことを、心こころから感謝かんしゃします。(サムエル下7、イザヤ52～53、ダニエル7、マラキ3、「聖書」一)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 大会会議 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 出エジプト19章1-9節 (旧約聖書124頁)

フィリピ1章1-6節 (新約聖書361頁)

説教・祈禱 「神の声を聞いた時から」杉山昌樹牧師

* 賛美歌 91:2-3

2. 角笛つのぶえ、吹きて、豎琴たてごと、かなで、主さんびを賛美たいこせよ。太鼓たいこにあわせ、神かみを賛美たいこせよ。

踊り舞おどいつつ、笛まと弦げんもて 神かみを賛美たいこせよ。

3. 鳴らせシンバル、響けシンバル、主なを賛美ひびせよ。神かみをあがめよ。

息いきのある者ものは、声こえをあわせて 主かみを賛美たいこせよ、ハレルヤ、ハレルヤ。

* 主の祈り 祈禱書1

天てんにまします我われらの父ちちよ

願ねがわくは御名みをあがめさせたまえ

御国みくにを来きたらせたまえ 御心みこころの天てんになるごとく 地ちにもなさせたまえ

我われらの日用にちようの糧かてを 今日きようも与あたえたまえ

我われらに罪つみを犯おかす者ものを我われらが赦ゆるすごとく 我われらの罪つみをも赦ゆるしたまえ

我われらを試こころみに会あわせず 悪あくより救すくい出いだしたまえ

国くにと力ちからと栄さかえとは 限かぎりなく汝なんじのものなればなり アーメン。

* 頌 栄 63

あめつちこぞりて かしこみたたえよ、みめぐみあふるる 父、み子、みたまを。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 古澤兵庫長老 (司会・受付 次週：門脇献一長老)

本日 受付 1階：古澤迪子・加藤良明執事 2階：大日南隆夫執事 /ZOOMホスト・録音：大日南悠

次週 受付 1階：星野房子・藤井牧子執事 2階：那珂信之執事 /ZOOMホスト・録音：番場 験也

* グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

フィリピ1：1-6 「神の声を聞いたときから」

挨拶と感謝

今日からフィリピの信徒への手紙を一緒に読んでいきます。最初の1-11節は、挨拶と感謝の言葉で、いわば導入にあたる部分です。その中でも、1, 2節が挨拶の言葉です。ところで、この挨拶の部分にもフィリピ書ならではの特徴があります。それは、とても短いということと、そして、実はローマ書にも、コリント書にも、ガラテヤ書にもあるものがないという点です。それは、パウロが使徒だという言葉が欠けているということです。例えばガラテヤ書では「人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ、」というように、かなり気合が入っているのがわかります。ところがフィリピ書では、このようにして私は使徒だと力説していないのです。それは、おそらく、パウロが、フィリピの人たちをよく知っていた、ということが大きいようです。そもそも、パウロが初めてフィリピを訪ねたのは、第二回伝道旅行と言いまして、イエス様を人々に知らせる二度目の長い旅において、初めて、アジアを離れてギリシアにわたったその直後のことでした。その様子は使徒言行録16章11節以下に描かれていますが、パウロとその仲間たちは、港に着くとすぐにフィリピの町に行って滞在し、安息日に、祈りの場所に出かけてみたところ、紫布を扱う商人であったリディアという女性と出会い、福音を伝えてすぐに彼女と家族に洗礼を授けたのでした。そこから、フィリピの教会は始まっていったのです。

挨拶の特徴

今日の聖書の5節には「最初の日から今日まで」という言葉があります。それはあの最初の日からこの手紙を書いている今に至るまで、あなたたちと私たちは、同じキリスト者として歩んできましたね、という意味です。そのような親しい関係、しかも後で読みますとわかるのですが、パウロや他の教会を経済的にも助けてくれていたフィリピの教会にたいしては、パウロと一度も会ったことがないローマの教会に宛てた手紙のように、わざわざ「私は使徒です」というところから語る必要がなかったのです。よくわかり合えていたのです。とはいえ、この時、パウロは、13節にはっきりと書いてありますが監禁されていました。また、フィリピの教会にも、これもあとで具体的な話が登場しますが、信仰における苦しみが内に外にあったようです。そのようなパウロがよく知っている教会、具体的な顔が思い浮かぶ人たちがいる教会に対して、教会とは何なのか、キリスト者であるとはどういうことであるのか、ということを変更して確認して励まし合いたい、このような願いをもって書かれたのがこのフィリピ書です。

それではまずこの挨拶の言葉についていくつかのを見ていきます。最初はキリスト・イエスの僕という言葉です。これは、パウロとテモテのことです。ここでは、パウロとテモテが特に上下の区別なく、並んでいます。それは、テモテをパウロと同格の働き人としているという意味です。そして、このことは若いテモテがそれなりに成長して、役に立つ奉仕者となつて、パウロの助手というよりは同労者となつたという事実を告げるだけの言葉ではないのです。

キリスト・イエスの僕

これは、現実の私たちの教会においても実際にあることですが、例えば、牧師同士は、基本的には、会議における権利は同等です。ベテラン牧師も、一年目の若手牧師も、その点では区別はありません。或いは、私たちの教会では、教会の意思決定は小会会議において最終的に決まっています。そのような小会会議の議員としては、牧師も、長老も全く同じ一人の議員として等しい権能を持っています。しかし、先ほどの牧師同士の関係でも、あるいは、牧師と長老、長老同士の関係においても、全く平等の関係が作れているだろうか、と問われますとどうだろうか、と思うところがあります。どうしても、年齢や能力といった、人間的な力に基づく、上下関係ができやすいように見えます。けれども、この手紙では冒頭から、テモテを導いで伝道者に育てたパウロと、その弟子であったテモテを並べて、キリ

スト・イエスの僕だ、というのです。どっちも僕、油を注がれた方、私たちの王であり、祭司であり、預言者であるイエス様の前には、ひとしく僕だ、イエス様に仕えるものなのだ、ということをはっきりと言っているのです。そしてそれは、現代でいうところの教職者であるパウロとテモテだけのことではないのです。

キリスト・イエスに結ばれ

ここでは手紙の受け手が「フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち」と続きます。さらにその後、「ならびに監督たちと奉仕者たちへ」とありますように、まずは一般信徒たちのことが言われ、それに続いて、監督と奉仕者が並んでいましてこれもおそらくわざとです。この人たちは教会に仕えている人たち、監督というのは、教会運営に責任を持っていた人たちで、奉仕者というのは、パウロ達のようにみ言葉に仕えていた人たちのようですが、現代の教会で言えば役員たちかもしれません。そのような人たちを含めて、我々もあなた方も、教会での立場は、それぞれ違うかもしれないけれども、みんなイエス様の僕である。みんなイエス様に結ばれている、このように言うのです。ちなみに、このところを協会共同訳聖書は「イエス・キリストにあるすべての聖なる者たち」と訳しています。これをもっと直訳しますと、「イエス・キリストの内にある聖なる者たち」となります。あなたも私もイエス様の内にあつて生きています、ということ。祈禱会に参加して下さっている方は、ご存じのことですが、我が家には小さな水槽がありまして、金魚がいます。金魚は当たり前ですが、水の中にいます。同じように、私たちキリスト者は、目には見えませんが、イエス様の中に生きています、イエス様と一緒に生きています、あの最初に出会って言葉を交わした日からずっと、私たちはそのようにして生きています、こうパウロは言いたいのです。さらに言えば、そのようにイエス様の中に生きていくという事実によって、わたしたちがどのようなものであろうとも、ただイエス様の内において、私たちはすでに聖なる者となっている、このように言うのです。

めぐみと平和

さらに2節では、パウロはフィリピ教会の人たちに「恵みと平和」があるようにと祈っています。しかし、これは、パウロが祈ったことによって、魔術的な力が働いて、上から恵みと平和が降ってくる、というような意味ではありません。これは、私たちの教会の、例えば礼拝の最後にいつも祈っております、祝祷ですとか、あるいは、報告の時に私や司式長老の方が祈ってくださる執り成しの祈りについても全く同じです。とりなしの祈りは、当然、神様にお願いをする祈りですけれども、そこで間違っただけなのは、祈りを聞いて事態を変えてくださるのはいつでも神様ご自身であるということです。さらに、このところで祈られております、「恵みと平和」は、この言葉が祈られることで、なんとなく心が落ち着く、ですとか、こんないいことが後から起こった、というような性質のものではありません。まあ、そのようなことがあってもよいと思いますし、実際にあるかもしれませんが、そこが中心ではないのです。むしろこの「恵みと平和」は、祈りそのもの、あるいは祈りを含めた生活そのものが、すでに「恵みと平和」である、そのような意味で祈られている言葉のはずなのです。と言いましても、少々わかりにくいかもしれません。それで、実は今日の3-6節がまさに、パウロの感謝の祈りの言葉となっていますから、残りの時間でこの所についていくつかのことを一緒に読み取っていきたいのです。その際、一つ覚えておきたいのは、この2節の祈りが「父である神と主イエス・キリストから」で始まっていることです。神様とイエス様かやってくる「恵みと平和」です。それはどんな「恵みと平和」でしょうか。

祈りの中で－感謝と喜び

3節の「あなた方のことを思い起こすたびに」というのはまさに、祈りにおいて思い起こす、という意味です。丁度私たちの教会でも週報のNEWS面に祈りの課題を載せていますが、その中に、特に祈りに覚えたい方たちのお名前を載せています。わたしはこの金曜日にお名前のある方たちと、それ以外にも執り成しの必要があると思われる方を毎朝のお祈りの中で覚えています。しかし、そこで大切なのは、ただ、名前をあげることではないのです。この3節で注目したいのはそのような祈りにおいて、パウロが自分がよく知っているフィリピ教会の人たちの顔を思い出すたびに、その祈りの度に「感謝している」と言っていることです。それは、単に、フィリピの教会の人たちとの関係が良好だから、経済的にサポートしてもらったことがあるから、という意味ではないはずです。そうではなく、その根拠は、5節にある通りです。すなわち、「あなたがたが最初の日から今日まで、福音に与っているからです」とある通りです。あの最初の出会いから、今に至るまで、福音に、すなわち、イエス様が、私たちの罪をあがなって下さり、私たち自身は何もしていないのだけれども、あるいは、そもそも、神様に逆らうようなことばかりしてしまうものだけれども、そうであるにもかかわらず、神様のものとしていただいている、イエス様にぐいと心をつかまれて、イエス様の守りの中で生きている、神様とイエス様と一緒に生きている、この事実があるために、感謝と喜びが絶えない、自分の状況がどうであろうと祈りのたびに感謝がある、というのです。

福音にとらえられ

ちなみに「福音に与る」という場合の「与る」という言葉は、ギリシャ語ではコイノーニアという言葉です。この言葉は、東部中会75周年記念宣言においても、鍵の言葉になっていました。それは、ただ「まじわり」というだけではなく、お互いに、ですとか、分け前をもらう、といった意味を含みこんだ言葉でした。ここでパウロが言いたいのは、この「分け前に与っている」という意味だと思われます。神様が、イエス様が、あらかじめ、私の取り分を用意してくださっていた、そして、ある時、イエス様の言葉に触れて、ああ、これが自分の受け取る言葉だ、とわかって、そのような自分の取り分をもらった、ということがあったでしょう、と言いたいのです。そして、もし、皆様の中で、まだ、洗礼を受けていない、信仰を持つに至らない、という方がおられたとしても、そのような方の取り分を神様は、イエス様は用意してくださって、差し出してくださっているはずなのです。私たち人間の側は、ただ、これを受け取っていただけなのです。そしてそれは、一度で終わらないのです。毎日毎日、毎週毎週、福音に与り続けていくのです。その時に何が起きるのかを語っておりますのが、次の6節です。

始めと完成

「あなた方の中でよい業を始められた方」というのは今お話ししました通り、神様であり、イエス様です。神様とイエス様とが差し出してくださった良い知らせ、福音をある時私たちは受け取るのですが、それもまた、実は神様によるものなのだ、神様がそれを始めてくださったのだ、とこのところは言っています。そうしますと、私たちのあり方は、やはり受け身なところがあるということになります。自分で何とかするというよりは、神様が、用意してくださって、神様がよいと思われるときに、私たちに福音の言葉を受け取るようにしてくださるのです。そのようにして、受け取られた福音はそれで終わりなのではなくて、完成に向かっていく、というのです。もちろん、最終的な完成は、世界が新しくされる時、そして私たちが復活の命をいただく時、ということになるのですが、しかし、そこに至るまでのあゆみ、この地上の生涯においても、その先に向かう力、完成に向かう力、すなわち神様の導きの力が働いているのです。そのことについて、私は確信していますとパウロは言います。すなわち、パウロがそうであるように、フィリピのキリスト者たちもまた、あるいは誰であれ、キリスト者は皆、たとえそのように見えない時でも、苦しいとしか思えない時でも、実際パウロはこの時捕らわ

れの身だったのですが、そのような時でも変わらず、この神様の御手の中に生きている、神様の僕として、神様の恵みと平和の中を生きている、それゆえ、パウロは感謝と喜びにあふれてくる、というのです。

神の声を聞いたときから

いずれにしましても、私たちはこのようにして、私たちに語り掛けて下さる神さま、私たちに働きかけて下さる神さま、私たちを招いて下さる神さまによって、聖書を通して、説教を通して、神様の声を聞くようにと促されています。そして私たちが聖書の中に、説教の中に神様の言葉を聞き続けることによって、私たちを完成へと、強く導いてくださるのです。

祈り

全てをご支配しておられる父なる神さま。あなたは、永遠の昔から、私たちの救いをよしとされ、そのように計画して下さり、最もふさわしい時に、あなたの声を聞く耳を与えてくださいますから感謝します。私たちはただあなたのみ声を慰めとして、その御あとに従いたいと願っております。どうぞ、私たちの中ですでに始まっておりますあなたのみ業をますます確かなものとして下さり、私たちを御国に至るまでお守りください。この週の歩みをもあなたがなご導きください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。